View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Niigata Regional Repository

論文におけるメタ言語表現について
―メタ言語表現と論の展開とのかかわり―

清水まさ子
日本女子大学大学院

要旨

本調査では、論文におけるメタ言語表現を「話題内容を表すメタ言語表現」（例：本稿では～を考察する）と「方向づけを表すメタ言語表現」（例：次にＯＯについて見てみよう）の大きく２つに分け、それぞれのメタ言語表現がどのように論文内で使われているのか、「動詞の種類」「出現位置」「文末表現」を関連させながら考察した。調査の結果、序論や結論では「話題内容を表すメタ言語表現」がよく使われていた。序論では、これから始まる論について述べるためにル形が、結論では今までの調査を振り返って述べるためにタ形が使われていた。本論におけるメタ言語表現については、話題内容を表すメタ言語表現も使われていたが、方向づけを表すメタ言語表現が多く、またその表現に多様性が見られることが他の序論・結論と異なる点だった。なぜ本論で方向づけを表すメタ言語表現が使われているのかについては、この調査対象が人文系論文であったことがあげられる。つまり人文系の論文における本論では、考察→事例→意見など、論の流れがめまぐるしいからだと考えられた。

キーワード：学術論文、話題内容を表すメタ言語表現、方向づけを表すメタ言語表現、出現位置

０．はじめに

日本語学習者に対するアカデミック・ライティング教育が近年、注目されている。

アカデミック・ライティングの指導を行う際に必要なことの一つとして深澤（2005）は、異なる専門分野の論文において共通に必要だと思われる事項を調査することが重要だと述べた。そして例として、パラグラフ・ライティングや「論理を展開する文章に共通に用いられる文型の抽出」（深澤 2005 :13）を挙げた。既に論理展開を支える語句（例：～によって、したがって、すなわち）は調査されたり（村田 2000）、共通してよく用いられる語句についての記述はなされてきている（池上 2005）。しかしながら論を展開する際には、このような語句の他にも、いわゆる言語表現を言語によって言及する「メタ言語表現」（例：これから～について述べる／ここで４つ例をあげよう等）を使う場合がある。

論文におけるメタ言語表現について論じている論文はいくつかある（杉戸・塚田 1991、高橋 1997）。杉戸・塚田はメタ言語表現をいくつかの種類に分類したこと、また４００編の論文を対象に、そこで使われているメタ言語表現を量的に調査したことが評価できる。しかし、その調査対象論文が１分野であり、提示されたメタ言語表現が他の分野でも使われているのか分からない。また、メタ言語表現に使われている動詞の種類を中心に調べられているが、それらの動詞の文末表現については詳細に述べられていない。高橋では、講義の談話と論文におけるメタ言語表現を調査し、書き言葉・話し言葉におけるメタ言語表現の比較がなされているが、調査対象の論文が４編と少ない。このように、論文におけるメタ言語表現について論じている論文はあるが、それらが調査対象の分野や量的な問題があり、まだ十分であるとは言えない。

そこで本調査では、再度論文におけるメタ言語表現に着目し、どのような表現で書かれているのか量的な調査を行い、それらを論文やレポートを書く学習者に提示できるようにする。

１．先行研究

１．１．学術論文におけるメタ言語表現とは何か

メタ言語表現について、杉戸は「言語行動について言及し、それ自体が言語表現をともなう言語行動」（杉戸・塚田 1991：133）と述べている。また西條は「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことについて言及する表現」だと定義づけている（西條 1999:14）。つまりメタ言語表現とは、言語行動（これから言うこと／今まで言ったこと）を言語によって言及する表現だと言える。

それでは、学術論文におけるメタ言語表現とは具体的にどのようなものを指すのだろうか。大島（2009）は社会科学系の論文における構成要素を調査した結果、その論文を構成している要素として、「事実記述」「引用」「取り上げ」「評価的描写」「推論・解釈」の５つを特定した。この中の「取り上げ」の中の下位要素として、「研究展開」を挙げた。この研究展開とは、「論の進め方や研究行動の展開に言及するもの」（大島 2009：17）であり、例として「以下では～の検討をしてみる」や「～を行った」などが挙げられている。これらはつまり、論者が自分の「論文」という言語行動の中で、どのような言語行動を行うか述べている文であり、メタ言語表現に当てはまる。また浜田ほか（1997）でも、論文には①事実を述べる文、②意見を述べる文、③行動を述べる文があるとし（ｐ44）、この行動を述べる文があることで読み手に「ここではこういうことについて述べるのだな」あるいは「ここからが本論だな」といったことが伝わり、論の構成がより伝わると述べている（ｐ45）。行動を述べる文とは著者自身が自分の論の中で、その言語行動を述べて、読み手に論の構成を分かりやすく伝えているものだと言え、これもメタ言語表現であると言える。

以上のことから学術論文においてメタ言語表現とは、論者が論文の中で、論の進め方や研究行動について言及する表現であり、その目的としては、読み手に論の構成を分かりやすく伝えるものであると言える。

１．２．論文におけるメタ言語表現についての先行研究

談話におけるメタ言語について調査されているものは多くある。その中で、論文やレポートといった書きことばを対象に、その中のメタ言語表現について量的に調べたものに杉戸・塚田（1991）がある。これは、①メタ言語表現の文末表現（例：～ショウ、シテミル等)、②メタ言語表現の中心的な動詞、③メタ言語表現の出現場所についてそれぞれ調査したものである。特に②の中心的な動詞については全ての動詞が記述され、かつどのような接続表現や語句とともに出現したか詳細に書かれている。

しかしこの調査では、それぞれの調査結果同士が関連して考察されておらず、学術論文におけるメタ言語表現がどのように表れているのか把握しにくい。例えば、「次のことを考えよう」というメタ言語表現があった場合、この調査では文末表現の①「～しよう」と②「考える」という動詞、そしてこの③「考える」という動詞の位置がそれぞれ調査され、②と③は関係づけて調査されるが（つまり「考える」は論文中のどこに出現したか調査されるが)、①と②、および①と③が関連して調査されてはいない。つまりメタ言語表現における文末表現と動詞との関係、さらには出現位置との関係が解明されていないのである。

１．３．論文におけるメタ言語表現の種類

杉戸・塚田（1991）は、論文におけるメタ言語表現の類型を以下のようにまとめた。(杉戸・塚田：p147, p153)

①そこで扱おうとする話題内容に明示的に言及する表現

例）ここでは～について話す／　本論では～について考察する

②論文の文章としての流れや構成にかかわる言語行動に言及する表現

例）～から話を始める／　次に～にうつる

③文章を構成する作業の単位としての言語行動に言及する表現

例）例を挙げる／　～を引用する

④作業単位を含む論文構成の言及（②と③の混成）

例）例を挙げて説明する／実例を挙げながら考えてみる

⑤読者や関係者への対人的な配慮としての＜あいさつ＞的な言語行動についての言及

例）～に触れなかったことをお詫びする／篤く御礼申し上げる

この中で論文の内容に直接かかわってくるのは⑤を除く①～④までである。この①～④を見てみると、話題内容そのものに言及するメタ言語表現である①[1]と、言語行動に言及する②

～④に分けられる。つまり①は話題内容そのものを表すメタ言語表現であるのに対し、②～④は論文の中で「これから何をするか」「これから論はどの展開に入るか」など「論の方向づけ」を表すメタ言語表現だと言える。

①のようなメタ言語表現については、言語学系の論文にとどまらず、他の分野でも確認されている。村岡ほか（2005）が農学系・工学系論文における「緒言」の論理展開を調査したところ、「緒言」の最終段落には「本稿では～について述べる」といった①のメタ言語表現を使い、内容を示している論文が多いことが分かった。また木本（2006）は法学系論文における序論の文章構造について調査したが、ここでも序論の最終部分には論文の主な内容や特徴を述べる表現がくることがわかった。

これらの調査結果から、論文の分野を問わず、序論の最終段落部分には①のメタ言語表現が来ることが多いと言える。しかし、村岡（同上）、大木（同上）の先行研究は論文の序論部分しか調査していなかった。このような話題内容を明示的に言及するメタ言語表現は序論以外には出現しないのだろうか。

２．本稿の目的

本調査では、上記の先行研究をもとに以下のような目的をたてた。

論文におけるメタ言語表現を、論や節の内容を概略的に表すメタ言語表現と論の方向づけを表すメタ言語表現の大きく２つに分け、それぞれのメタ言語表現が「論文内のどのような位置で」「どのような動詞とともに」「どのような文末表現を伴って」出現しているのか調査していく。そして、学習者が論文を書く際には、どのようにメタ言語表現を使っていけばいいか提言する。

３．調査の概要

３．１．調査対象資料

多種多様な論文があるが，今回は人文系論文に絞り５分野，１種類につき１０編，計５０編を調査対象とした。これらは『学会名鑑』(2004）において「人文科学部門」に分けられている分野からそれぞれ会員数が最も多い学会を選びだし，その学会が刊行している学術雑誌を選んだ。調査対象とした期間は 2007 年 4 月時点で最新の論文から選んだ。今回の調査は「論文」ということで，「研究ノート」や「書評」は対象にしなかった。以下は論文の詳細である。

『国際政治学研究』（国際政治学会）１０編（総文数：1, 802　総文字数：130, 821）
『英文学研究』（英文学学会）１０編　（総文数：1, 481　総文字数：126, 749）

『現代経済学の潮流』（日本経済学会）１０編（総文数：2,788　総文字数：167,060）
『考古学研究』（考古学研究会）１０編　　（総文数：2,422　総文字数：155,354）
『心理臨床学研究』（日本心理臨床学会）１０編（総文数：2,097　総文字数：135,408）
調査対象論文の全てをOCRで読み取り，それらテキストをエディタソフトの「秀丸」を用いて句点ごとに分け文数を数えた。また文字数はMicrosoft Wordの文字数カウント機能を用いて数えた。

３．２．調査対象としたメタ言語表現

本調査では、１．１で定義したメタ言語表現における文末動詞（例：～を述べる／～を考察する）に注目する。中には「～という考察を始めるが、そもそもＯＯとは…」と、文末ではなく節内にメタ言語表現が来る場合があったが、それについていの考察は別稿に譲ることにした。また「この結果から、ＯＯＯと考えられる」といった意見文は意見文として別稿で論じるため、ここでは調査対象としなかった。

３．３．調査方法

①論文全体におけるメタ言語表現の用例数を調査し、２種類のメタ言語表現それぞれの用例数を調べる。
②２種類のメタ言語表現それぞれにおいて、その出現位置・動詞・文末表現を関連させながら量的な調査を行う。
③上の２つの調査から、レポートや論文を書く日本語学習者に論文内でメタ言語表現を使うにはどうしたらいいか提言する。

３．４．出現位置についての調査方法

一般的に論文の構成は、序論・本論・結論となっている。木下（1990）によると、序論とは、本論に入っていくため準備を整える場所であり、本論とは調査・研究のやり方と、それによって明らかになった事実を述べる部分であり、結論とは、本論の調査・研究の結果を簡潔に列挙しまとめ、それにもとづいて見解を組み立てる部分であるであるという（ｐ94－96）。二通ほか（2010）は論文の種類を大きく２種類にわけ、それぞれの構成を示した。まず一つ目は実験や調査を行い、そのデータから考察を得るような実験系の論文である「検証型論文」であり、次は先行研究や引用を行いながら、ある方向に議論を進める論文である「論証型論文」である。これらは、それぞれ以下のように示される。

「検証型」論文の構成例	「論証型」の論文の構成例
序論【緒言/はじめに/目的】	序論【はじめに→先行研究の提示】
本論【方法/実験/実験方法→結果→考察】	本論【議論の展開→議論の展開→議論の展開】[2]
結論【提言/おわりに】	結論【議論のまとめ】

（二通ほか 2010：p9−p10 をもとに筆者がまとめた）

本調査では、上記の分類をもとに、論文の種類によって序論・本論・結論がどこか定めた。中には章の切れ目がない論文もあり、序論・本論・結論の境目がわからない論文もあったが、それらは「その他」として分類した。

３．５．文末表現についての調査方法

日本語の文の述部は、例えば以下のように階層的に構成されている（益岡 2007）。

(1)彼は大切に育てられ　/　ている　/　　ようだ　　/　　ね　/

（一般事態）　（個別事態）　（判断のモダリティ）（発話のモダリティ）

益岡（同上）によると、文の階層は大きくわけて４層あるという。一層目は「一般事態」の階層であり、ここでは用言の語幹やヴォイスが表される。そして二層目は「個別事態」の階層であり、ここではアスペクトやテンスが表される。三層目は「判断のモダリティ」であり、ここで「真偽判断」や「価値判断」が表される。そして最後に発話のモダリティであり、ここでは発話態度や丁寧さ、発話類型が表される。このように、文末表現は階層をなしているのである。これらの構造をまとめると以下のように表すことができる。下の図１を見て分かるとおり、文の構造は入れ子型構造になっている。

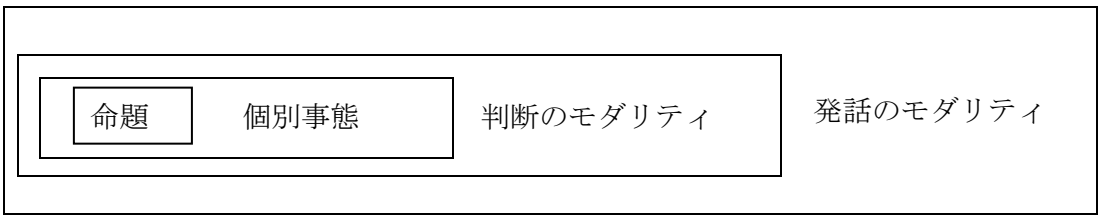

図１：文の意味的階層構造

杉戸・塚田（1991）では、文末表現を以下のように分けた。分類の例を下記に挙げる[3]。

～する系	188	～する(85)　～することにする（40） ～することにしよう(33)　～することにしたい（25） ～することにとどめたい（5）
～しておく系	175	～しておこう（66）　～しておきたい（66）　～しておく(44) ～しておくことにしよう（3）

上の益岡の分類をもとに考えてみると、この分け方は「～する系」を命題を表すグループとし、「～しておく系」を命題＋個別事態を表すグループとしていると考えられる。しかし、この「～する系」と「～しておく系」の下位分類を見てみると、階層ごとに分類されていると言えない。つまり杉戸・塚田の分類は、何に拠って分類されているのか明確ではない。そこで本調査では、文末表現をモダリティの観点から分類すべく、以下のような分類を行う。

(2) 次の図について考える。　　(3) 次の図について考えてみる。

(4)次の図について考えよう。　　(5)次の図について考えてみよう。

(6)次の図について考えてみようではないか。

表１：文末表現の分類方法の例

基本的なモダリティ形式	実際のモダリティ形式	実際の用例
ル系	ル、テミル	考える、考えてみる
ヨウ系	ヨウ、テミル＋ヨウ	考えよう、考えてみよう
デハナイカ系	ヨウデハナイカ	考えてみようではないか

まず(2)と(3)だが、両者とも「考える」「考えてみる」でル形で終わっている。非過去のル形で終わっている場合、それは「話し手が行為の実行を聞き手に宣言するものである」（日本語記述文法研究会 2003：52）という。それゆえ、(2)と(3)はル形として分けた。次に(4)と(5)であるが、これらの文末はヨウ形で終わっている。ヨウ形は「行為の実行を話し手が決意したことを表す」という（同上：53)。それゆえ(4)と(5)はヨウ形として分けた。最後に(6)であるが、(6)は否定疑問文であり、「デハナイカ」で終わっている。このデハナイカは、否定疑問文としての用法や、発話現場での認識の成立を表す疑問形式の用法などがあるが（同上：182)、この場合の用法は勧誘としての用法（同上：65）であると考えられる。それゆえ、これはデハナイカ系としてまとめた。

以上のように、本論ではメタ言語表現文の文末表現の分類をモダリティの観点から分類することにした。

４．結果及び考察

４．１．論文におけるメタ言語表現の総数

論文におけるメタ言語表現は全部で３８５例あった。以下に、各論におけるメタ言語表現の数を表す。

表２：各論におけるメタ言語表現の総数

序論	本論	結論	その他	計
119(30.9%)	219(56.9%)	40(10.4%)	7(1.8%)	385(100%)

表２を見ると、メタ言語表現は本論において最も多く出現することが分かった。本論が最も分量が多いので、その分メタ言語表現も使われているのは当然であろう。

次に、「論文全体や節の話題を表すメタ言語表現(以下、話題内容のメタ言語表現と述べる)」と「方向づけを表すメタ言語表現（以下、方向づけのメタ言語表現と述べる)」の全体の割合を示した（表３)。２種類のメタ言語表現のうち、話題内容のメタ言語表現は 60.8%と過半数を超えており、方向づけを表すメタ言語表現よりも多かった。

表３：２種類のメタ言語表現の割合

	話題内容	方向づけ	合計
用例数	234	151	385
割合	60.8%	39.2%	100%

さらに上記の表２と表３を合わせて、各論において２種類のメタ言語表現が、それぞれどのくらいあるのか調査した。それが以下の表４である。

表４：各論における２種類のメタ言語表現のそれぞれの割合

序論		本論		結論		その他	
話題内容	方向づけ	話題内容	方向づけ	話題内容	方向づけ	話題内容	方向づけ
99(83.2%)	20(16.8%)	94(42.9%)	125(57.1%)	36(90.0%)	4(10.0%)	5(71.4%)	2(28.6%)
119(100.0%)		219(100.0%)		40(100.0%)		7(100.0%)	

表４を見ると、各論で２種類のメタ言語表現の割合が異なることが分かる。話題内容のメタ言語表現については、序論と結論で全体の８割以上を占めていた。序論についていえば、先行研究で序論の最後の部分にその論の概略的なことを述べることが多いと指摘されていた通りだったが、今回の調査で、序論以外でも論の概略的な内容が書かれていたることが分かった。

次に方向づけのメタ言語表現について言えば、本論での出現が最も多かった。本論ではメタ言語表現を使いながら、論の進む方向を示している場合が多いと言える。逆に序論や結論では、方向づけを表す表現にあまり頼らずに話題が進んでいることが分かる。

４．２．話題内容を表すメタ言語表現について

４．２．１．序論における話題内容を表すメタ言語表現

この節では、序論における話題内容を表すメタ言語表現について、出現場所・文末表現・動詞を関係づけながら調査していきたい。

まず、序論における話題内容のメタ言語表現の文末表現と動詞をまとめた。それが以下の表５である。表５を見ると、序論において話題内容を表すメタ言語表現では、その約７割がル形の動詞を用いて書かれていた。これは、以下のような表現で表されていた。

(7)この論文では所得移転のある場合とない場合を分けて特恵的貿易協定を結ぶインセンティブを分析する。（経済学）

先行研究で言及されているように、ル形の文末表現と「本論では～／この研究では～」といった表現とともに使い、論文全体の概略を説明していた。また(8)のように、論文全体ではなく、節ごとに紹介している場合もあり、その場合もル形で終わっていた。

(8)そこで以下の行論では、この従来は看過されてきた一面に焦点を当てて、神川の国際政治学を全体的に俯瞰する。まず第一節で神川が国際政治上の主体として重視していた集団の単位を明らかにした後に、続く第二節では、神川がその主体を「生物学的自然法則」に載せながら国際政治の「現実」と「理想」を描き分けていた様子を概観する。そして第三

節では、神川の国際政治学の通時的な観察を通して浮かび上がるやや微細な変化について考察する。（政治学）

ル形はテンス的に見たとき、未来を表す。よって、これからどのように論を述べていくかを表す時には、「本論では」や「この節では」といった表現とともにル形が多用されると考えられる。

表５：序論における話題内容のメタ言語表現の詳細[4]

基本的なモダリティ形式	実際のモダリティ形式	用例	用例数	割合
ル	ル	分析する（12）、論じる（論ずる）（７）、考察する（５）、行う（4）、進める（３）、検証する（３）、試みる（３）、明らかにする（３）、説明する（３）、提示する（２）、展望する（２）、注目する（２）、あてる、応用する、示す、概観する、概説する、記述する、議論する、取り上げる、述べる、紹介する、詳述する、整理する、着目する、提案する、導く、導出する、導入する、明確化する、俯瞰する、用いる	69	69.7%
	コトニスル	議論する	1	1.0%
	ヨウトスル	捉える	1	1.0%
	テイク	目指す	1	1.0%
ル系の合計			**72**	**72.7%**
タイ	タイ	こととする（２）、考察する（２）、提示する（２）、明らかにする（２）、述べる、検討する、再検討する、試みる、明確化する	13	13.1%
	テオク＋タイ	確認する（１）	1	1.0%
	テイク＋タイ	加える（１）	1	1.0%
	テミル＋タイ	考察する、考える、あてる、言及する	4	4.0%
タイ系の合計			**19**	**19.2%**
タ	タ	設定する、試みる、書く、行う、目的とする、経験する	6	6.1%
	コトニシタ	考える	1	1.0%
タ系の合計			**7**	**7.1%**
デアル	**名詞＋デアル**	**まとめたものである**	**1**	**1.0%**
合計			**99**	**100%**

４．２．２．本論における話題内容を表すメタ言語表現

次に本論において話題内容を表すメタ言語表現について調査する。序論と同じく、出現場所・文末表現・動詞を関係づけながら調査していく。

以下の表６は本論における話題内容のメタ言語表現の文末表現と動詞をまとめたものである。

表６：本論における話題内容のメタ言語表現の詳細

基本的なモダリティ形式	実際のモダリティ形式	用例	用例数	割合
ル	ル	説明する（７）、行う（６）、検討する（５）、考える（３）、考察する（３）、分析する（３）、示す（２）、試みる（１）、まとめる、仮定する、記載する、検証する、実施する、とする、述べる、紹介する、展望する、導く、報告する、明らかにする、こととする、論ずる	44	46.8%
	テミル	検証する、考察する（２）、振り返る	4	4.3%
	テオク	整理する	1	1.1%
	コトトスル	論じる	1	1.1%
	テイク＋コトトスル	見る	1	1.1%
	コトニスル	考える	1	1.1%
ル系の合計			**52**	**55.3%**
ウ／ヨウ	ウ／ヨウ	概観する、要約する、考える、検証する、進める、必要である、概観する	5	5.3%
	テミル＋ウ／ヨウ	行う、分析する（２）、考える（２）、見る、検証する	7	7.4%
	テイク+ウ／ヨウ	見る、明らかにする	2	2.1%
	テオク＋ウ／ヨウ	触れる、概観する	2	2.1%
	Ｎ＋デアル＋ヨウ	必要だ	1	1.1%
ウ／ヨウ系の合計			**17**	**18.1%**
タイ	タイ	論じる、述べる、取る、再考する、確認する、試みる	6	6.4%
	テオク＋タイ	確認する、明らかにする、一瞥する、見る	3	3.2%
	テイク+タイ	探る、確認する、進める	3	3.2%
	テミル＋タイ	考える、捉える、答える	3	3.2%
タイ系の合計			**15**	**16.0%**
タ	タ	入る、示す、確認する、得る、捉える、例示する、試みる	7	7.4%
	テキタ	進める、試みる	2	2.1%
	コトガデキタ	提示する	1	1.1%
タ系の合計			**10**	**10.6%**
合計			**94**	**100.0%**

序論と同じくル系で終わるメタ言語表現は55.3%と最も多いが、70%以上がル形文末であった序論に比べて、それほど割合が高くない。そのかわり本論における話題内容のメタ言語表現の特徴としては、その文末表現の種類の多さである。序論では１１種類であったのに対し、本論でのメタ言語表現の種類は表６を見て分かる通り、１８種類あり、序論よりも多かった。特に序論と異なるのはウ／ヨウ系のメタ言語表現があることである。このウ／ヨウ系文末のメタ言語表現とは、以下の通りである。

(9)実証分析を行う前に、パネルデータが示す経済成長と政治体制との関連を概観しておこう。（政治学）

(10)各資料のおおよその帰属時期を踏まえつつ，分布状況の検討を進めよう。（考古学）

(9) (10)ともその節の冒頭に出てくるメタ言語表現であり、その節についての内容を表していると考えらえる。

本論における話題内容のメタ言語表現は、序論とは異なり、節の内容を表す時に使われる。序論には「研究領域の提示→研究の必要性の提示→その論文についての説明」という決まった論の型が多いとされた（木本 2006)。そのような型において論文を概略的に説明するには、「本稿では～論ずる」のように、文末にはル形が来るという一種の「型」ができているのではないかと思われる。逆に本論において節の概略を説明するには、序論のような「型」が決まっておらず、節の冒頭にも置く場合があるため、ウ／ヨウ系などのメタ言語表現が使われているのではないだろうか。

４．２．３．結論における話題内容を表すメタ言語表現

この節では、結論における話題内容を表すメタ言語表現について、出現場所・文末表現・動詞を関係づけながら調査していきたい。まず、結論における話題内容のメタ言語表現の文末表現と動詞をまとめた。それが以下の表７である。

表７：結論における話題内容のメタ言語表現の詳細

基本的なモダリティ形式	実際のモダリティ形式	用例	用例数	割合
タ	タ	行う（４）、検討する（４）、明らかにする（４）、分析する（３）、進める（２）、とする、検証する、言及する、考察する、加える、実施する、述べる、評価する、提示する、あとづける、試みる、着目する、論じる、示す、得る、認める	33	91.7%
	テキタ	検討する	2	5.6%
	コトガデキタ	示す	1	2.8%
合計			**36**	**100.0%**

結論における話題内容のメタ言語表現は、序論・本論と比べて用例数が少なかったが、文末表現はタ系 100%であり、また序論、本論と異なりバリエーションが少ないことがわかった。結論では、以下のようなメタ言語表現が使われていた。

(11)本論は、“The world”の語り手を仮構されたペルソナとするポストの問題提起を受け、まず、それがペルソナだとする見方の妥当性を作品に即して検証した。(英文学)

(12)虐待を受けた小学生のロールシャッハ反応に見られる特徴を，スコアの数値的指標だけでなく，感情カテゴリーや思考・言語カテゴリーを用いて検討した。　(心理学)

結論における話題内容のメタ言語表現は、上記のように「論の振り返り」として書かれていることが分かる。これは序論と反対で、既に述べたことであるのでタ形が多く用いられていると考えられる。また本論とは異なり、文末表現の種類が限定されている。このことから、序論だけではなく結論においても論述の「型」があり、よってメタ言語表現の種類も限定されているのではなかろうか。

４．３．方向づけを表すメタ言語表現について

４．３．１．本論における方向づけを表すメタ言語表現について

次に、方向づけのメタ言語表現について見ていく。序論、本論、結論のうち、序論と結論における方向づけのメタ言語表現は２０例と４例であったのに対し、本論では１２５例と他のセクションに比べて非常に多かった。ここでは本論における方向づけを表すメタ言語表現について見ていく。

表８：本論における方向づけを表すメタ言語表現

基本的なモダリティ形式	実際のモダリティ形式	用例	用例数	割合
ル	ル	分析する（４）、検討する（３）、まとめる（３）、考察する（２）、なる（２）、検証する（２）、考える（２）、得る（２）、表す、ある、置く、書く、進む、求める、分ける、後述する　述べる、紹介する　整理する　定義する	32	25.6%
	テオク	提示する、確認する、まとめる、整理する、述べる	5	0.8%
	コトニスル	見る、検討する	2	1.6%
	テミル	検討する	1	0.8%
	コトガデキル	述べる	1	0.8%
ル系の合計			**41**	**32.8%**
ウ／ヨウ	ウ／ヨウ	考える（８）、検討する（４）、示す（２）、説明する（２）、提示する（２）、分析する（２）、挙げる、ある、なる、引き出す、分類する、向ける、戻る、解説する、見る、定義する	30	24.0%
	テミル＋ヨウ	見る（8）、展望する、考える、描く、整理する、立ち戻る	13	10.4%
	テオク＋ウ／ヨウ	挙げる、紹介する、コメントする	3	2.4%
	テイク＋ウ／ヨウ	見る、検討する	2	1.6%
	コトニスル＋ウ／ヨウ	表す	1	0.8%
タ系の合計			**49**	**39.2%**
タイ	タイ	補足する、留意する、考察する、概観する、説明する、論証する、立てる、考える、注目する	9	7.2%
	テオク＋タイ	注意する、述べる、注目する（２）、行う、紹介する、論じる	7	5.6%
	テミル＋タイ	考える、述べる、検討する、着目する	4	3.2%
	テイク＋タイ	検討する、見る	2	1.6%
	テイク＋コトニスル	見る	1	0.8%
タイ系の合計			**23**	**18.4%**
タ	タ	試みる、検討する、得る、なる	**4**	3.2%
デアル	N＋ノ＋ヨウデアル	次のようである（５）以下のようである（１）	5	4.0%
	N＋デアル	見方である、通りである、三点である	3	2.4%
デアル系の合計			**8**	**6.4%**
合計			**125**	**100.0%**

上記の表８を見ると、１２５例中で出現傾向が多いのはル形とヨウ形であり、それぞれ32.8%、39.2%であった。以下にそれぞれの例を出す。

(13)以上の準備作業を経て，本題であるM2の予測力に関する実証分析へと進む。

（経済学）

(14)以上より，縄文時代中期から弥生時代にかけての「収穫具」と想定されている打製刃器1）は　以下のように整理できよう。　（考古学）

本論における方向づけを表す文は、(13)のように「これから論文はどの方向に進むのか」や、(14)のように「これからどのような情報の操作を行うのか」を言語によって明示的に表していた。これらの機能は、さらに詳しく分類できると考えられるが、それは後稿に譲ることにする。

本論において、このように方向づけを表す文が多いのは、この調査対象が人文系論文であるということが要因である可能性がある。つまり、人文系論文ではデータや事例を対象に言及していくのではなく、自分で論を組み立てていく必要がある。事例や引用、考察などが一つの節の中に組み込まれることもある。それゆえ、本論では方向づけを表すメタ言語表現がよく使われるのではないだろうか。

５．まとめ

本稿では論文におけるメタ言語表現を２種類に分け、メタ言語表現が論文においてどのように使われているのかについて考察した。その結果、序論や結論では「話題内容を表すメタ言語表現」がよく使われていた。序論では、これから始まる論について述べるためにル形が、結論では今までの調査を振り返って述べるためにタ形が使われていた。

本論におけるメタ言語表現については、話題内容を表すメタ言語表現も使われていたが、方向づけを表すメタ言語表現が多く使われていることが、序論・結論と異なる点だった。なぜ本論で方向づけを表すメタ言語表現が使われているのかについては、この調査対象が人文系論文であったことがあげられる。つまり人文系の論文における本論では、考察→事例→意見など、論の流れがめまぐるしいからだと思われる。

以上の調査・分析から、人文系論文を書く日本語学習者には以下のようなメタ言語表現に関するアドバイスが提示できる。

①序論においては、論の概略をル形を用いて述べる。結論においては、論の振り返りをタ形を用いて述べる。本論において節の概略を述べる際には、ル形やタ形以外にも、様々なバリエーションを使うことが多い。

②序論・結論においては、方向づけを表すメタ言語表現はあまり使わない。序論では先行研究で述べられているような「型」が決まっていることがあるので、メタ言語表現を

用いて論の流れを示すよりも、論の型を正確に用いて論を構成する必要がある。逆に本論において、論を構築するには方向づけのメタ言語表現を用いて構成する。その際には、ル形やウ／ヨウを使って論を構成するが、そのほかにも様々な文末表現のバリエーションを使う必要がある。

最後に、論文におけるメタ言語表現を教える際には、文末表現のバリエーションにも注目する必要があろう。ここでいう文末表現のバリエーションとは、文法が複数組み合わされている場合を指す。つまり、「これからＯＯについて見ていくことにしよう」のように、文法が組み合わされている表現がメタ言語表現には多い。初級レベルの文法の組み合わせについても、メタ言語表現を書く際には必要になるであろう。

今回はメタ言語表現を大きく２つに分けて調査した。それぞれのメタ言語表現には、より多くの分類が可能であろう。それは次回の課題としたい。

注

１．話題内容を表すメタ言語表現には上記の①で挙げたように「本論では～について考察する」といった表現を含む。この「～について考察する」は、判断表現の「～と考えられる」と類似した形を持つが、両者の用いられ方は異なると思われる。本論で扱うメタ言語表現は「～について考察する」の前に「本論では～」「この節では～」といった節や論のまとめを示す表現が前につき、その論や節の内容を１文でまとめているものである。従って、結果や事例からその原因や理由を考察する「～と考えられる」は本稿ではメタ言語表現とは考えず、調査対象としない。

２．この３つの「議論の展開」は、それぞれ異なる議論の展開である。例えば、「日本語の歴史」を述べた」論文の中で、「中世の日本語→近世の日本語→近代の日本語」というように、それぞれの節が異なるトピックについて述べていることを指す。

３．下の（　）内の数字は用例数を示す。

４．「ル」は意思のモダリティ（日本語記述文法研究会 2003:53)、「タ」は叙述のモダリティ(同：17)を表していると考え、基本的モダリティとして入れた。

参考文献

池上素子（2005)「原因を表す「によって／により」－学術論文コーパスにおける用いられ方—」『日本語教育』(127）:21-30

大島弥生（2009)「社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析」『専門日本語教育研究』(11）:15-22

木下是雄（1990)『レポートの組み立て方』筑摩書房

木本和志（2006)「法学系論文の序論に見られる文章構造の分析—民法、商法、知的財産権法

系論文を対象に―」『専門日本語教育研究』（８）：19-26
西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
杉戸清樹・塚田実知代（1991）「言語行動を説明する言語表現－専門的文章の場合―」『国立国語研究所報告１３　研究所報告集１２』：131-164
高橋淑郎（1997）「講義・論文におけるメタ言語表現」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』（43）：131-138
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
日本学術協力財団（2004）『学会名鑑』日本学術協力財団
日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法４　第８部　モダリティ』くろしお出版
浜田麻理・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生・留学生のための日本語論文ワークブック』くろしお出版
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版
村岡貴子・米田由喜代・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也（2005）「農学系・工学系日本語論文の「緒言」の論理展開分析―形式段落と構成要素の観点から―」『専門日本語教育研究』（７）
村田年（2000）「多変量解析による文章の所属ジャンルの判別―論理展開を支える接続語句・助詞相当句を指標として―」『統計数理』：48－2
深澤のぞみ（2005）「作文教育における日本語教師と大学専門教員との協力のために」『日本語教育ブックレット８』国立国語研究所：3-13